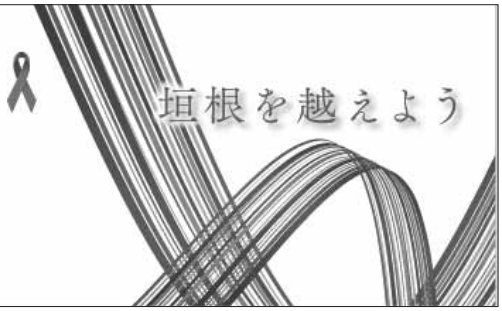
垣 根 を 越 え よ う

第24回 日本エイズ学会学術集会・総会ニューズレター

第 7 号（最終号）

発行：2010年12月30日（木曜）

編集：第24回日本エイズ学会学術集会・総会ニューズレター編集班



日本エイズ学会総会、開催される
次回テーマは「新たなエイズ制圧への道」

エイズ学会２日目の11月25日午後１時15分から第１会場で日本エイズ学会総会が開かれ、次期第25回学術集会・総会の会長である日本医科大学の高橋秀実教授（微生物学・免疫学）から準備状況が報告された。会期は11月30日（水）～12月２日（金）。会場は東京・西新宿のハイアットリージェンシー東京。高橋会長自身が「臨床医学を実践する基礎医学者」であり、社会・臨床・基礎の３分野の成果を治療の進歩につなげる「新たなエイズ制圧への道」がテーマに掲げられている。

また、2012年の第26回学術集会・総会の会長には樽井正義慶應義塾大学教授（倫理学）が選ばれた。

「制圧」と「共生」２つのキーワード

日本エイズ学会の前身のエイズ研究会が発足した1987年を起点とすれば、2011年は四半世紀（25年目）の節目にあたる。「慢性感染症であるHIV/エイズに対し、いまの治療法で完全に制圧できるのかどうか。検査を駆使することによって感染を早期に把握し、ウイルスを標的とする高価な治療をできるだけ早く開始する。それが本当にベストの方法なのか。ウイルスとの共生を含め四半世紀の節目にもう一度、考えてみたい」と、高橋秀実会長は語る。

抗レトロウイルス治療（ART）の普及によりHIV/エイズは致死的な病気ではなくなったといわれるが、それでHIV/エイズの流行が克服できるのかどうか。2010年7月にウィーンで開かれた第18回国際エイズ会議では、予防も含めたARTの成果が強調される一方で、「Towards a Cure:HIV Reservoirs and Strategies to Control Them（完治に向けて：HIVリザバーとその制御戦略）」というワークショップが開かれた。治療を始めたHIV陽性者のすべてが生涯にわたって服薬を続けることを前提にしたARTの現実を直視すれば、可能性とともに限界も自ずと見えてくるからだ。

「エイズは慢性病であり、しかもウイルスの持続感染症である。その治療を抗ウイルス療法だけで押し切れるのか。社会・臨床・基礎の知識を共有し、こうやるとうまくいくという新たな方法をみんなで考えてみる必要がある」

高橋会長は「新たなエイズ制圧への道」についてこう説明する。分野を超えた知識の共有は第24回のテーマ「垣根を越えよう」の継承でもある。学会２日目の午後には、基礎・臨床、社会・臨床の３つのシンポジウムを開き、その終了後に全体で１年間の研究の成果を報告するまとめのセッションを開催する。基礎研究・疫学の現状と進展、社会が抱える課題とその克服に向けた動き、治療の現状と進歩などに関する知識を共有するセッションだ。引き続いて懇親会を開き、知識の共有を踏まえた分野横断的なディスカッションの機会を確保する方針だという。

新たな制圧の可能性について、高橋会長は「感染した人の血液中からHIVがいなくなっても、粘膜には残っている。粘膜免疫的な観点からの研究も重要だ。粘膜に棲息するウイルスをなぜ制圧できないのか。世界的な権威を招き、会長自らも参加するかたちで、この大きなナゾを解明する知恵をさぐっていきたい」と話す。ウイルスが残存する場所である体表面粘膜の樹状細胞についてはTeunis Geijtenbeek博士（オランダ）、NKT細胞についてはJ. A. Berzofsky博士（米国）を招待。さらにわが国における粘膜免疫の権威である東京大学の清野宏教授らによる講演を行なう予定だ。

第25回学会のポスターのスライドを前に呼びかける高橋会長

少数のHIVは残っていても、粘膜組織に存在する免疫力の活性化により、抗レトロウイルス治療と併用あるいは不在のまま長期にわたって増殖を抑え込むことは可能であろうか。高橋会長は「粘膜におけるウイルスとの共生概念も視野において考えたい」という。比較的安定した状態で人とウイルスの共生関係を実現することもひとつの方策である。

ここでの「制圧」は「あくまでウイルスの制圧であり、病気にかかった人を制圧しようというわけではない」（高橋会長）という前提に立ったうえでの話だが、自己治癒力の増強も含め、病気と闘う力を高めることが「共生」というコンセプトのもとでの「制圧」として語りうるとすれば、社会的な観点からも示唆的である。

「垣根」は越えられたか？

――岩本会長インタビュー

会議のプログラムの番外編ともいうべき11月26日（金）夜のフィナーレを文字通り最後に、第24回日本エイズ学会学術集会・総会は３日間の幕を華々しく閉じた。今学会のテーマである「垣根を越えよう」はどこまでプログラムの中に反映されたのか。フィナーレの余熱も冷めやらぬ12月１日（まさに世界エイズデー）の午後、東京大学医科学研究所を訪れ、岩本愛吉会長に話を聞いた。

「基礎、臨床、社会といった分野の垣根を越えるために設けたプレナリーやラパトアセッションは、これまでのエイズ学会にはなかったプログラムなので、担当した人たちは大変でした。でも、その報告が素晴らしく、プレナリーには連日、たくさんの人が訪れていました。外に向かって分かりやすく話していくことを意識した講演がそろっていたように思います」

――基礎と臨床の間の垣根の克服という意味でも有意義だったという声も聞きました。

「最近の若い医師は、総合臨床医としてのトレーニングを受けるので、結果として基礎的なことに接する機会が少なくなり、臨床と基礎の垣根が逆に高くなっている面もあります。それだけに、ワクチンや流行ウイルスのサブタイプ、耐性といった話を広くとらえる機会が得られたことは貴重だったのではないでしょうか」

――ラパトアはいかがでした。

「大変なご苦労だったと思いますが、予想よりもはるかによくまとまった報告をしていただきました。ラパトアには300食分の軽食を用意していたのですが、すべてなくなりました。最終日の夕方までたくさんの参加者に残っていただき感謝しています」

――国境の垣根を越えるという意味では、来年8月に釜山で開かれる第10回アジア太平洋地域エイズ国際会議（ICAAP）に関するセッションが初日の午前中にありました。

「アジア太平洋エイズ学会（ASAP）のザヒード・フセイン理事長と釜山ICAAP組織委員会のミュン・ハン・チョウ副会長が一緒にセッションをしました。２人は前日の夜11時ごろまでホテルで打ち合わせをしていました。ASAPとICAAPに関する事前のメールのやり取りは、２人の間で激しい意見の応酬になることも多かったのですが、２人とも、おれたちは会えば仲がいいんだ、と話していました。いい機会を提供できたのかもしれません」

ジェンダーや年齢の垣根を越えた型破りのフィナーレも含め、意欲的な試みに満ちた今回の日本エイズ学会は、ニューズレター編集班にとっても非常に刺激的な会議だったことを付け加えておきたい。**（聞き手・宮田一雄）**

エイズ学会 最終日報告

【プレナリーセッション３日目】

ワクチン開発の現状 ＭＳＭ対策への決断の必要 新たなニーズに応えるカウンセリング

３分野（基礎・臨床・社会）からその最前線を、他分野の人にも伝えるプレナリーセッションは最終日、その趣旨も広がり、多くの参加者が“垣根を越える”時間を共有した。

基礎分野からは、「エイズワクチン開発：HIV感染症克服への挑戦」と題して、医科研から転任したばかりの俣野哲朗・国立感染症研究所エイズ研究センター長が、ワクチン開発の可能性と現状について講演した。ワクチン開発は、抗HIV薬の開発や啓発などの社会的予防活動とならぶ感染拡大阻止のための重要な取り組みである一方、感染者数の増大は新たなタイプのHIVや、薬剤への耐性変異株の出現にも結びつき、開発努力と現状はまさに追いかけっこの状態にある。俣野センター長の報告は、研究の現場の息吹きを伝えるもので、座長をはじめ多くの参加者から賛辞が寄せられていた。

国内MSM対策の第一人者である市川誠一・名古屋市立大学教授は、社会の分野で「MSMにおけるHIV/AIDS：疫学と対策について」の報告を行ない、発生動向や、自身もその中心となって取り組んできた各地のMSMコミュニティでの取り組みを紹介した。「同性愛者」という垣根を越えて、基礎や臨床に携る人びとも、MSMコミュニティの取り組みの実際に触れる機会となった。

市川教授は、研究費頼みの現状を憂え、男性同性愛者等はわが国のエイズ対策の重点対象層であり、国や自治体が男性同性愛者層のHIV感染に施策として積極的に取り組む決断の必要を訴えた。

最後に、臨床の分野からは、荻窪病院血液科の小島賢一・臨床心理士が、「カウンセリングが果たした役割と課題」と題し、日本でエイズ問題とつねに並走してきた心理カウンセリングについて、その歴史を振り返り、現状や課題、今後の方向などを示す報告を行なった。エイズ問題の初期にカウンセリングが果たしてきた役割についてすでに知らない世代も多いなか、歴史の流れに触れる貴重な講演となった。

【ラパトアセッション】

初の試み、好評のうちに幕 一般演題の傾向を全体で共有

最終日16時50分から、今回初めて試みられる企画、「ラパトアセッション」が開催された。一般演題においてどのような発表がなされたのかを、ラパトア（報告者）が報告するものだ。

基礎分野からは、大阪大学微生物研究所の塩田達雄教授が報告に立った。塩田教授は事前のインタビューのなかで、

演題の取捨について「基礎から、臨床・社会にどういうことを伝えられるかを重視して選ぶ」と答えている（6号記事）。ラパトワ報告でも、「垣根よりも上に見えるものを中心にまとめた。垣根の下に他分野からは見えないものが多くある。その上に応用があるのだということをご承知おき願いたい」と述べた。

新しい発想による新薬開発やワクチン開発の現状、またそれらの基礎にあるウイルス増殖の仕組みの研究やそれを評価する動物実験の解析などについて報告した。

兵庫医科大血液内科の日笠聡医師は、臨床分野の演題ヲ報告した。臨床では薬剤の効果や薬剤選択の傾向について毎年、一群の報告があり、薬剤ごとに「正」の字を用いて今年の報告傾向を表したスライドには、日笠医師のユーモラスな語り口ともあいまって会場に微笑が漏れた。

日和見感染症の治療では、あいかわらず多いニューモシスチス肺炎の診断、さらにバクタやペンタミジン、アトバコンなどの薬剤選択に関する報告があった。またエイズ合併症では、腎臓障害や骨代謝異常の報告があったこと、そして動脈硬化や心筋梗塞の演題が登場しはじめたことへ注目を促した。

社会の分野からは、次々回のエイズ学会長への就任が決まった樽井正義・慶応大学教授が、「予防」「治療・ケア」「サポート」に分類して報告した。予防領域においては、さまざまな働きかけで行動変容を促す試みが重ねられ、それらがあいまってコンドーム使用を押し上げていることが報告された。また、サービスを提供する側もさまざまな研修を通じて、「与える」立場から当事者を「受け入れる」へと、支援に変化が現れていることも触れられた。

もっとも白熱した議論が展開したのは、パートナーへの告知支援のセッションだったという。拠点病院や保健所での、パートナーへの検査勧奨の実態やその勧奨方法について、フロアも交え議論が盛り上がったという。こうした情報を他分野の人が知るのも、ラパトアセッションの醍醐味と言えようか。

樽井教授は最後に「日本の課題はアジアの課題でもある」として、基礎・臨床分野からも釜山でのICAAPへの参加を呼びかけて報告を締めくくった。

【フィナーレ】

垣根を越える喜びを実感
一番楽しんだのは、仕掛人自身？

学会で、こんなことがあってもいいの？　多くの人が驚いた「フィナーレ」が、学会公式プログラムの最後であるラパトアセッション終了後、引き続き同会場で開催された。

フィナーレの仕掛人である岩本会長は、それまでのネクタイをはずし、Tシャツとジーンズに着替えて登壇。そのシャツには、「FREE HUG!」のメッセージが。会場は驚きと笑顔に包まれた。

ステージでは、ゲイコミュニティから招いたドラッグクイーンのショーが開始。クラブシーンなどで人気を誇る「ブルボンヌ」と「サセコ」、そしてfemaleドラッグクイーンの「ジャンジ」が登壇し、それぞれ十八番の演目を披露。バカバカしくもなんとも痛快なショーに、参加者も大爆笑。しかし、このテイストが、陽性者の７割以上を占めるMSMのメンタリティの、たしかに一つではあるのだ。

続いて小島功・日本漫画家協会会長を迎え、岩本会長の司会でトークショーへ。小島会長の往年の花柳界の思い出や会場との掛け合いに花が咲いた。

The アルバム！

写真左から、1「垣根を越えよう」と掲げてワクチン開発の現状を語る俣野エイズ研究センター長（プレナリーセッション最終日）　2女性ドラッグクイーンのジャンジのパフォーマンス（フィナーレ）　3フィナーレで小島功さん（右）と語る岩本愛吉会長　4最後まで多くの人で賑わったフィナーレ会場

【ニューズレター班 制作余話】

多様な課題と論点、語り合う場は可能か？

東京大学医科学研究所の岩本愛吉教授から「ニューズレターを発行できないでしょうか」と相談を受けたのは2008年の暮れだった。岩本さんにとっては第24回日本エイズ学会学術集会・総会の会長を引き受けることが決まってからまだ日が浅かったのではないかと思う。

国際エイズ会議やアジア太平洋地域エイズ国際会議に参加した方はご存知だろうが、HIV/エイズ関係の国際的な大会議では、充実した内容のニューズレターが会期中、日刊で発行されている。会議の規模が大きくなれば、現場にいる参加者にも全貌はなかなかつかめない。いまここで何が行なわれているのか。ある程度の規模と内容を押さえることのできるメディアが必要だ。今学会のテーマである「垣根を越えよう」にもつながることだが、国際エイズ学会（IAS）の理事でもある岩本教授には、こうしたニーズ感覚が早くからあったのだろう。

情報の発信という意味では、ウェブサイトももちろん活用できる。その重要性を否定するつもりはないが、一方で新聞・雑誌など紙のメディアの手法が有効なセッティングも一方にはある。編集という機能を間にはさみ、球技でいえば中盤で一つタメを作るような作業を介在させることの可能性を試してみたい。岩本さんからのお話を聞いて、怠惰な日常を送る新聞記者にも、ちょっと色気が出た。

HIV/エイズ対策は予防と支援が両輪でなければならないということがしばしば指摘される。その通りだと思う。ただし、最近のエイズ政策をめぐる閉塞状況も含めて考えると、もうひとつ「表現」という視点が必要なのではないか。そのようにも感じる。予防＋支援＋表現の3つの柱をたててみたい。「感染の当事者」という限定された意味での当事者論ではなく、HIV/エイズの流行という世界史的現象の渦中に身を置いているといったより広い解釈での「当事者」が、その経験をどのように表現してきたのか、そして、いま、しているのか。そこに焦点をあてたメディアを創設してみたい。そんな色気である。

バックナンバーも含め発行ごとに好評を得たニューズレター

じつは2006年の第20回学会の会期中にも３回、Ａ４判１枚のニューズレターを発行したことがある。雑誌編集の豊富な経験を持つ永易至文、「Monster」の写真家として知られる菊池修、企業広報の担当者としてメディア社会の最前線に身を置く吉田智子、それに新聞記者の経験だけはいたずらに長い私を加えた４人のスタッフでチームを編成した。Ａ４裏表の２ページで写真も入るのなら、記事の分量は数時間あれば１人で書いてもこなせる。記者としてその程度の自信はあったが、実際には４人のチームがうまく機能し、予想以上に気持ちよく仕事ができた。

そうしたささやかな成功体験を頼りに今回も永易至文デスクを中心に馴染みの４人で臨み、事前にA４判８ページで３号、会期中はスピードを重視してボリュームを減らしA４判４ページで３号、そして会議終了後に最終の第７号と、全部で７回発行した。事前号は雑誌的色彩が強く、会期中発行分はより新聞的な編集スタイルになっている。

今回のニューズレターの編集を引き受けた際、編集班スタッフがひそかに考えていたのは、HIV/エイズの流行によって提起されるさまざまな課題を議論できるような紙のメディアの創設は可能かどうか、その手ごたえを確かめてみたいということだった。

学会のカバーという観点から言えば、時間的制約の面からもスタッフの規模からも、すべてを網羅的に紹介することは到底できない。それは最初からわかっていた。取材できたものを理解できた範囲で（誤解ももちろん、あるかもしれないが）、伝えることが精いっぱいだろうし、実際に精いっぱいだった。もう、くたくたです。

ただし、多少の自己満足もまじえていえば、そうした中でも現在のHIV/エイズ対策が抱える多様な課題とその論点はある程度、紹介できたのではないかと思う。とりわけ、《記者リポート》シリーズで取り上げた「HIV検査」（第１号）、「他科診療と病診連携」（第３号）、「薬物依存とHIV」（第４号）などは、書き手としての永易至文の力量を示す報告であることは強調しておきたい。

ニューズレターのバックナンバーは、第24回日本エイズ学会学術集会・総会の公式サイトにpdf版で掲載されているので、お読みいただければ幸いです。**（編集長・宮田一雄）**

編集を終えて

●40万人もの大観衆を集めたウッドストックコンサートは、劇場用の記録映画も公開され、人気を集めた。映画のラストに登場したジミ・ヘンドリックスは、戦闘機が飛び交うように米国国歌を演奏する。40年も前のことだ。曲はさらに『紫の煙』からスローなバラードへと移り、そのころには映像も野外コンサート跡地の清掃風景に変わっている。終わりましたねえ。なんというか、いまはそんな気分です。（編集長・宮田一雄）

●個人による情報“漏洩”や、その前段として間違った機密扱いの問題が取りざたされた。国民の感覚とメディアの報道の方向や力点の乖離、その背後には記者クラブ体制に象徴される報道する側とされる側の馴れ合いや、他媒体の排除があるという指摘もある。今回の小紙の仕事が、エイズに関る人が知りたいことを伝えるものとなれたか、年末ニュースハイライトを見ながら考えている。（永易至文）

第24回日本エイズ学会学術集会・総会
ニューズレター　第７号
編集長：宮田一雄
スタッフ：永易至文
写真：エイズ学会事務局提供

26日最終登録参加者総数：1455名